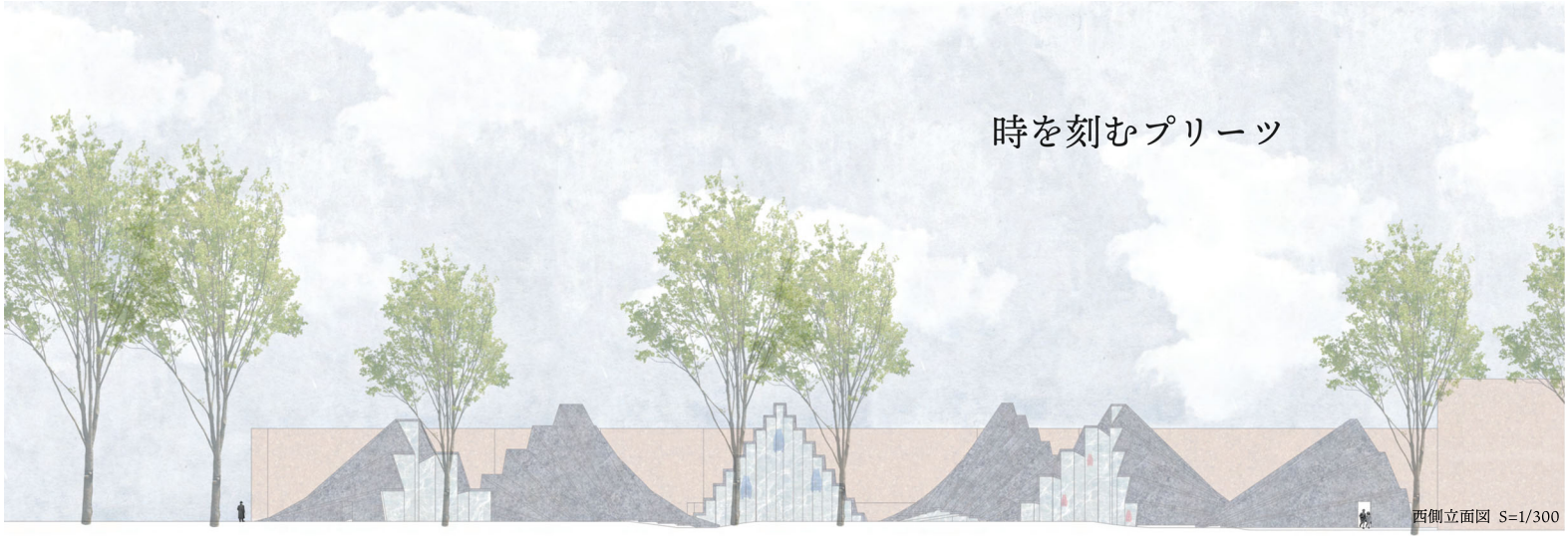
時を刻むプリーツ



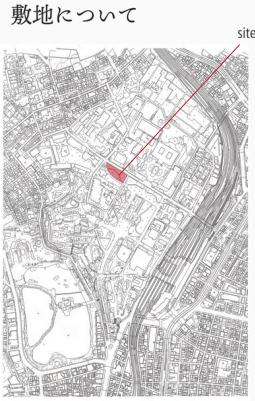
西側立面図 S=1/300

設計趣旨

現在、美術館の存在意義が問われてきている。なぜなら、今もはや美術館に足を運ばずとも、SNS やネット上で美術作品を見ることは容易にできるからだ。しかしそれらは、画面上にうつる平面的で二次元なものとして見え、立体的ではないので、影はできない。だから、影によってそのものの存在（美術館とそこにある作品）を感じ、そこに行かないと得ることのできない経験を作ることを提案する。影は、時間と場所によって形状が異なる。だから、訪れる日や時間によって必ず見える景色は異なり、違う日に訪れないと経験できない景色がある。これはまるでお花見のようである。桜は１年をかけて違う姿をしている。人々は春になるとお花見をするが、人生に１回だけではなく、毎年繰り返し行う。これは、お花見をすることで春を感じたり、人と喋ったり、人とご飯を食べたり、日本の慣習を体験したりできるという楽しさがあるからだと思う。時間によって姿を変える桜のように、時間によって影のできる空間が変わる、概念として桜のような美術館を設計した。

美術館を実際に体験することで、忘れられなくてまた来ようという気持ちを作り出す。そうすることで、これらの繰り返しが人々の中で起こり、持続的な美術館となる。ここに美術館を建てる意義と、これからも美術館という概念が無くなってしまわず残り続けていける意味を持たせる。せわしなく過ぎていく現代の生活だけれども、桜を見ることで春を感じるなどの、季節に対する造詣の深さを現代の人々が取り戻すべく、ゆったりとしたおおらかな空間を目指した。

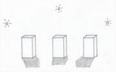
敷地について



上野公園はこれまでに、博覧会が行われたり、震災の復興の記念の場所であったり、日本初の公立美術館や日本初のルネサンス様式で作られた博物館があったり、戦後にはアメ横が発展したり、そして桜が植えられたり、たくさんの歴史を持つ場所である。そして最近でも、都美術館がリニューアルオープンしたり、パークサイドカフェができたりしていて、今もなお変化している。しかし、これらの美術館や博物館は点在しており、その全ての良さを人々にまだ享受できていないのではないかと思う。そこで、敷地を上野駅からできるだけ遠いところに設定し、たくさんの美術館の存在を確かめながら歩み進め、新しい美術館にたどり着くようにする。

影について

影 ＜
- 地域差・・・ここでしか体験できない影。
- 日較差・・・オルタナティブではない。
- 年較差・・・向きの違い。
- 年較差・・・長さの違い。



朝　昼　夕

影の動き　夏　春・秋　冬

１日をかけて影のできる場所が変わる。
さっきまでそこにあった影がない。
さっきまでそこになかった影がある。

１年をかけて、影の長さ、濃さが変わる。
夏は太陽の位置が高く、短くて濃い影。
冬は、太陽の位置が低く、長くて薄い影。

春　夏　秋　冬

これらはまるで、１年をかけて姿を変える桜のよう。いつ見ても違う姿をしていて、季節と時間の流れを感じさせる。

形状について

01　時間によって、影の対照がわかりやすい「プリーツ」を利用する。

影のできる側面が反転する
面の表と裏で影が逆になる

02　長方形と直角三角形を組み合わせたプリーツを作り出す。

03　そのプリーツを、開口部が大きくなるように重ねる。こうして、建築自身に影を落とし、内部にも外部にも影ができる。

04　それを、前後ろ逆に組み合わせることで、時間によって明るい / 暗い空間が反転する。訪れる時間によって異なる影を経験する。

敷地を眺める。上野駅から歩いて進む。ここにたどり着くまでにいろいろなルートがある。行く度に異なるルートを経験する。

敷地に立つ。木が鬱蒼としている。直射日光が当たりにくいので、大きな開口部を設けることができる。なんとなく暗い雰囲気を持ってい流ので、明るくなるよう対処すべき場所である。

敷地に立つ。起伏があり、中央に行くにつれて山になっている。

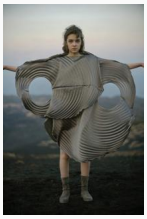
敷地沿いの道を眺める。人々の通り道となっており、ここで足を止める人はあまりいない。

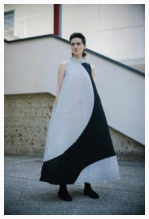
展示するアート

三宅一生による、イッセイミヤケのプロダクトを展示する空間とする。

三宅一生によるブランドのひとつに PLEATS PLEASE があり、『1 本の糸から素材を開発し、服の形に縫製した後にプリーツをかける独自の「製品プリーツ」手法による、プロダクトとしての衣服です。ISSEY MIYAKE で 1988 年に発表した「プリーツ」を発展させ、1994 年春夏コレクションから単独ブランドとしてスタートしました。
軽くてシワにならず、水洗いができ、コンパクトに収納や持ち運びができる機能性、日常のあらゆる場面で使える汎用性、着心地の良さ、そして美しさを兼ね備え、現代女性の日常に深く溶け込んでいます。「暮らしの中で生きてこそ、デザインの存在価値がある」という三宅一生の考えを実現させたこのブランドは、現在も進化を続けています。』（https://www.isseymiyake.com/ja/brands/pleatsplease）というものである。

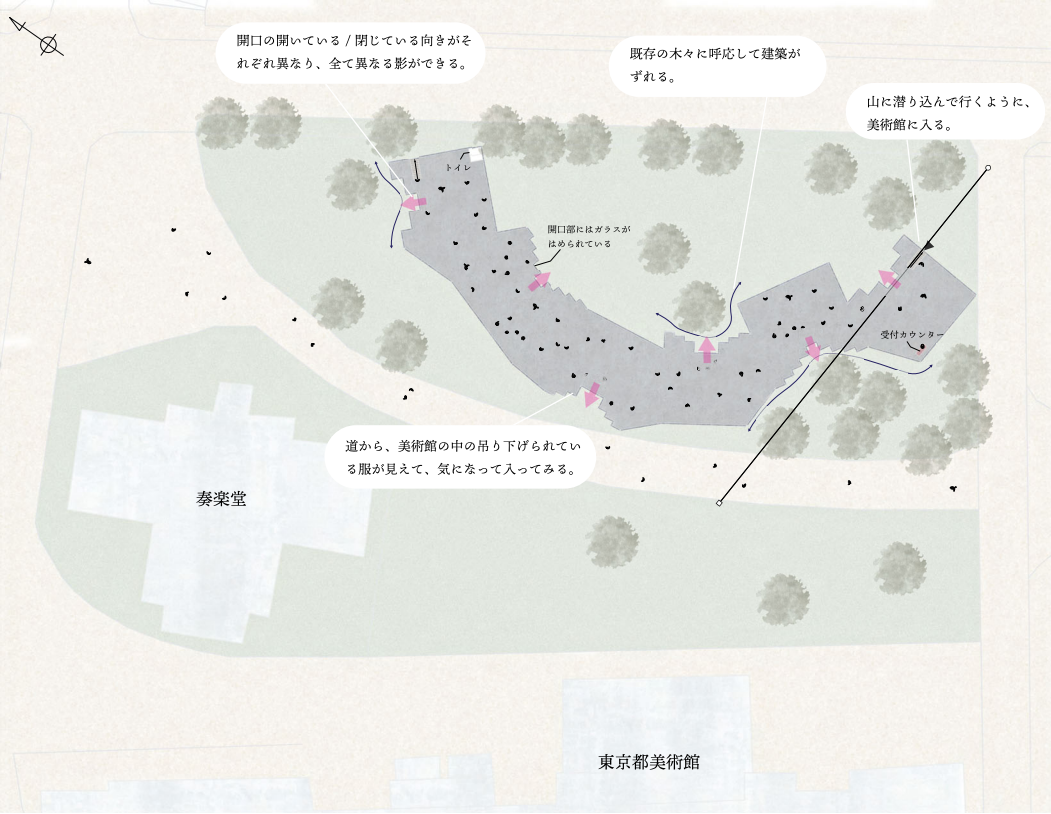
プリーツにインスパイアされた建築に、身に纏うためのプリーツを展示し、身体より大きなプリーツの中で身体と同じ大きさのプリーツを経験することで、建築と身体の呼応を経験する。





断面について

断面詳細図　s=1/100

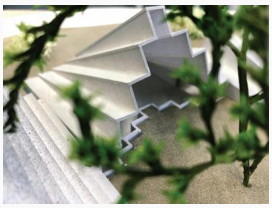


配置図兼平面図　S=1/600

プリーツの幅の違いによる影のでき方の違い

一番太いプリーツ

私たちがいつもの建築で経験している天井を大きく分割したような天井である。少し日常の天井とは異なり、日常の延長線上にきたという経験をする。

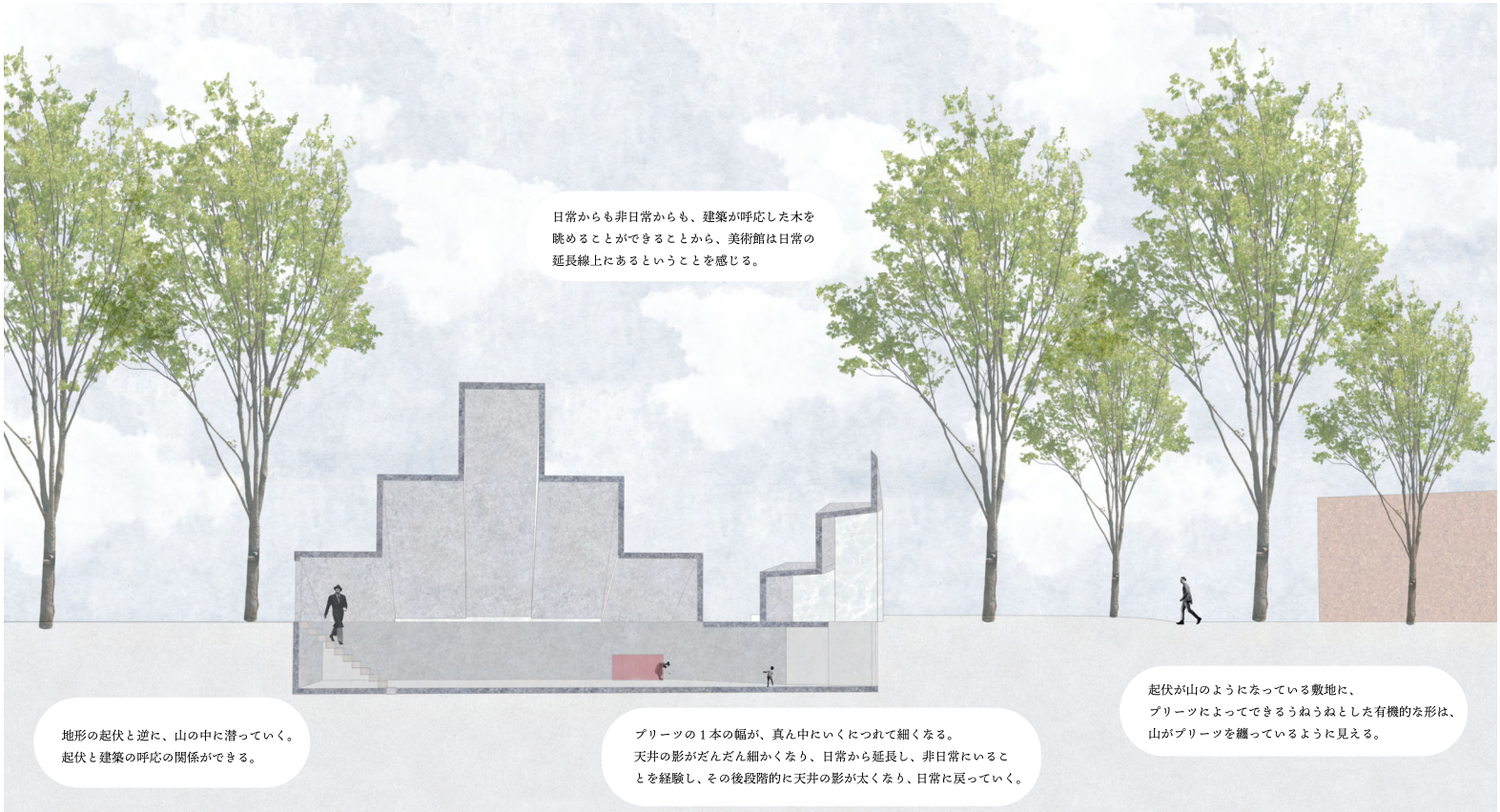


中くらいのプリーツ

もう少し細かいプリーツになる。一番太いプリーツよりもできる影の太さが細くなる。角の数も増えるので、影の数も増える。また一段階日常から離れる経験をする。

一番細いプリーツ

さらにより細かいプリーツになる。日常からまた離れた天井ではあるが、開口部が大きくなり、そこから外部空間が垣間見え、日常の延長線上にいるのだと認識する。



○-□断面図　S=1/100

南側立面図　S=1/300